公益財団法人日本陸上競技連盟
陸上競技研究紀要
第12巻, 168-171, 2016
Bulletin of Studies
in Athletics of JAAF
Vol.12,168-171,2016

第31回オリンピックリオデジャネイロ大会チームドクター帯同報告

鳥居　俊[1)]　　村上博之[2)]　　田村佑実保[2)]
1）公益財団法人日本陸上競技連盟医事委員会委員
2）公益財団法人日本陸上競技連盟医事委員会トレーナー部

はじめに

第31回オリンピックリオデジャネイロ大会は8月5日から21日までの17日間にブラジルのリオデジャネイロ市を中心に行われた。初めての南米大陸での開催であり、現地の治安状態やジカ熱対策などでさまざまな事前情報が飛び交ったが、幸い大きな混乱なく開催に到り、会期中も問題となるような事態はなく閉会式を終えられた。陸上競技は8月12日から21日までの10日間で競技が行われた。

選手団の構成

専務理事は本部役員として参加しており、麻場強化委員長が監督としてチームを率いた。コーチ・役員は26名（男性23名、女性3名）、競技者は52名（男性38名、女性14名）であった。メディカルスタッフは医師1名（鳥居）とトレーナー2名（男女1名ずつ）で、本部ドクターとして内科真鍋医師が本部医務室での診療やドーピング検査に帯同し、村外スタッフとして男性トレーナー1名が日中の選手村でのケアを対応した。

派遣前準備

週間コンディションチェックは6月24～26日の日本選手権の結果を受けた代表選手決定後に開始されたが、マラソン、競歩など早い時期に代表が決まっている種目の選手のコンディションを決定直後から収集することはできず、今後の改善が必要であった。今大会での提出率は村上トレーナーの報告にあるように、昨年の世界選手権とほぼ同様であった。なお、メディカルチェックは3月から7月までの間に候補となりうる選手を対象に多数回実施され、そこに含まれなかった選手は日本選手権後に受けることとなった。TUE申請を必要とする選手はいなかった。

国内での事前合宿（短距離:山梨、男子マラソン:釧路、競歩：千歳）、直前の時差調整合宿（米国プリンストン）を経て、リオ入りするという予定が立てられた。東京とプリンストンとの時差が13時間、リオとの時差が12時間である。

ドクターバッグの準備はJISSの上東さんに一任し、使用量の多い薬剤を追加してもらうという調整を行った。なお、本隊がリオへ移動した後もプリンストン入りする選手のために、ドクターバッグを通常より1個多く準備して事前合宿地に残した。

渡航および現地の状況

選手団本隊は8月1日午前出国でニューヨークJFK空港着、バスでプリンストンに向かった。この事前合宿については最終日まで帯同した金子先生に報告をお願いしたので、そちらを参照してほしい。現地時間で7日にJFK空港より南下し、8日にリオ市＊＊空港へ到着した。入国審査、手続きを経て、ADカードを空港内で有効化し（写真1）、バスで選

写真1　空港でのAD有効化

写真２　選手村の入り口

写真４　寝室

写真３　メディカルルーム

写真５　食堂内

手村へと入った（写真２）。

現地は季節としては冬であるが、緯度が南緯 22 度 54 分と那覇より赤道に近いためこの時期の平均気温が 22 度ということであった。選手村はリオ市南西部のバーラ地区に位置し、周囲に湖や草地が多く見られた。日本選手団棟は食堂やシャトルバス乗り場から近い好条件の位置であり、陸上競技チームは 18 階を中心に居住した。高層階のため虫が入る心配はないと油断していたら、数日後に室内で蚊に刺されることになった。

居室は居間と２つの寝室（写真４;各シャワー室、トイレ付）からなるマンション形式で、メディカルルームには居間を当てた（写真３）。シャワーやトイレの水流はやや頼りない感じはあったが、自室では幸い故障することなく最終日まで持ちこたえてくれた。

水道水は飲用ではなく、各自で食堂や支援企業ブースから飲料を部屋用に持ち帰っていた。洗濯は近隣の棟にランドリーがあり、当初受付や引き渡しで少々の混乱があったようだが、概ね問題なく済んだようである。食堂が居住棟の目前にあったのはありがたく、夜遅い帰村時にはバス停からそのまま食堂で夕食（夜食？）を取り、居室に戻ることが短時間、短距離で移動できた。

食堂は非常に大きいスペースが準備され（写真５）、さまざまな地域の料理が用意され（写真６）、果物類やデザートも豊富に置かれていた。なお、マシンで自由に飲むことのできるコーヒーの味が今一つであったのは残念であった。選手村内にはマクドナルドもあり、日本人店員も出張で来ており、後半になって選手やスタッフも利用していた。

現地での医療活動

AD カードが発行され選手村に居住できたメディカルスタッフはドクター１名とトレーナー２名であった。他に日本選手団本部医務室が日本選手棟の２階に設置され、本部ドクターとして整形外科２名、

写真６　中華メニュー

写真８　サブトラックの日本選手団テント

写真７　本部医務室診察ブース

写真９　レース前のブロック注射

内科２名が帯同しており、前述のように内科の１名が真鍋医師であった。本部医務室には独立した診察スペースが２室（写真７）、治療スペースもあり、物療機器もあったため、陸上競技選手も数名治療を受けた。

メディカルルームにはトレーナーベッドを２台置きトレーナーの治療やケアを行うとともに、医療バッグも常置することで内服薬の処方やブロック治療の希望にも対応した。競技期間中は、村外スタッフである１名のトレーナーが日中メディカルルームに滞在して選手への対応を行ったが、離村時刻が定められており、昨今の夜の時間帯の競技の増加のため競技場に出たドクターやトレーナーの帰村が０時を回ることもあり、ケアを希望する選手の要望に応えきれないことがあり、今後の改善策を練る必要がある。JOC では選手村からバスで 15 分程度の場所にハイパフォーマンスセンターを設置し、選手の診断、治療、コンディショニング、リラクゼーション、競技の分析など多方面に活用できるようにした。この場所でパーソナルトレーナーによるケアや治療を受ける選手もあった。

競技場まではバスで 40 分程度を要し、隣接するサブトラックのテントの１つを日本選手団テントとして確保し（写真８）、準備やケアの場とした。期間中、最も早くサブトラックに出発する選手に合わせてトレーナー、ドクターも同行し、選手の状態の確認、ウォームアップを見守り、競技へ送り出した。今大会でも、体調良好ではない選手に対して、故障部位の疼痛を緩和するための消炎鎮痛剤の処方、競技前の局所麻酔薬の注射（写真９）、睡眠障害に対する入眠導入剤の処方など、医療を要することが少なくなかった。内科疾患は感冒症状の発生も少なく、下痢腹痛が数名あったのみであった。女子２選手で計２種目の棄権はあったものの、２名とも２種目のエントリーであり、2 種目目に出場することができ、全ての選手が出場するという最低限の目標は達成することができた。

ドーピングコントロール

今大会はチームドクター1名体制であったため、競技会前の検査に呼ばれた際はコーチやチームスタッフに同行してもらって選手村内のメディカルセンターに行って検査を受けてもらった。持久系の種目では、血液検査と尿検査ともに実施されたようである。

競技後の検査は、陸上競技の期間中本部ドクターである真鍋医師が対応してくれたが、メダリストや入賞者以上にほぼ限定されていた。夜間の競技後の検査では帰村が深夜になり、スタッフも後半は睡眠不足に悩むことになった。

総括

今大会の前半は決勝に進める種目が少なく、男子20㎞競歩、棒高跳びの入賞のみで後半に進み、最終日前日の午前に50㎞競歩の銅メダル獲得、さらに夜に4×100Mリレーの銀メダル獲得という快挙により非常に好成績であったかの印象となった。しかし、最終日の男子マラソン（写真10、写真11）では全く入賞に手が届かず、国内メディアでは惨敗という記事が多く見られた。

医事委員会では、今大会のメディカルチームとして春の合宿帯同、メディカルチェック、週間コンディション報告に加え、代表選手の問題発生時には可能な限り国立スポーツ科学センターのクリニックを利用して検査や治療にあたった。また、こうした選手サポートの結果としての選手の競技成績や達成度を参加後調査という形式で収集し、選手の意見も求めるようにした。これについては別稿を参照されたい。

今大会での計画が奏功した点と課題が残った点をまとめる。山梨や釧路での国内直前合宿、プリンストンでの直前時差調整合宿は多くの選手のコンディションを把握でき、コーチやパーソナルトレーナーともコミュニケーションをとる機会となり有益であった。また、現地でも選手村の日本選手居住棟の位置が食事や出入りを考慮して最適であった。

一方、選手数と午前中から夜間までも行われる競技スケジュールを考慮すると、選手に対応できるメディカルスタッフが結果として不足であった。もちろん、日本選手団本部医務室や選手村医務室の利用も可能ではあるが、治療者と選手との信頼関係を構築する余裕のない状態での利用は非常に難しかったと推測される。パーソナルトレーナーとの連携は対応していただくたびに帯同スタッフ宛に連絡をもらい、競技直前の対応等に活用できた。

写真10　マラソン中のカーニバル

写真11　日本人選手のゴール

2020年は国内開催のため、事情は大きく異なると思われるが、逆に選手のコンディション情報が散乱しないように、帯同メディカルスタッフに集約されるシステムと人間関係を準備しておくことが必要であろう。